

平成 28 年 8 月 16 日

浜田市議会議長 西田 清久 様

議員名 上野 茂



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成 28 年 7 月 25 日 (月) ～7 月 27 日 (水)

2. 視察又は訪問先

(1) 和歌山県那智勝浦町 (色川地区)

内容 ① 自然・農業体験型観光と地域の担い手連携について

(2) 高知県津野町 (床鍋地区)

内容 ① 遊休施設の有効活用

3. 参加者 佐々木豊治、柳楽真智子、上野茂

4. 調査経費 41,762 円

レンタカー代 12,750 円 ガソリン代 3,867 円 高速道路代 8,680 円
宿泊費 16,290 円 駐車場代 175 円

5. 調査研究活動の概要

(1) 視察に至った経緯

浜田市は人口減少とそれに伴う産業経済の縮小を最大の課題としている。また、学校統合により廃校になったまま利用されない多くの学校がある。今回視察した和歌山県那智勝浦町色川地区は、昭和 30 年ごろ人口 3000 人あり、農林業や鉱山労働者等で村は活気にあふれていた。平成 3 年ごろには人口 600 人を割り込みこのまま推移すれば地域社会の崩壊につながりかねないとの危機感が深まり、旧小学校を改修した塾を開設し、新規定住者や就農希望者の受け入れ、新旧住民が融和する中でともに地域の活性化を図ろうとしている。2か所目の高知県津野町の廃校を活用した拠点施設「森の巣箱」、高齢者の希望が多かった「村のコンビニ」憩いの場として「居酒屋」「温泉施設」宿泊可能な校舎、多くの遊休施設を抱える浜田市の参考にならないか、その取組みを視察した。



(2) 研修内容

① 那智勝浦町色川地区の活性化と、移住促進の取り組み

【取組の概要】

色川地区は和歌山県那智勝浦町の北西に位置する山村で、標高200から400mの急峻な山肌に9集落が点在し、鉱山の閉鎖や高齢化などで急激に過疎化が進んできた。

昭和52年に有機農業を目指して移住してきた5家族が「耕人舎」という組織を設立したのをきっかけに定住希望者の受け入れが始まる。

平成3年には地域代表による「色川地域振興促進委員会」を設立し、町立の施設「籠ふるさと塾」を通じて農業実習や体験プログラムなどを実施し官民一体の取組となっている。

・移住促進事業の内容

平成7年に旧小学校校舎を改修し、定住促進の拠点、町立「籠ふるさと塾」を整備し。運営は色川地域振興促進委員会に委託している。

「籠ふるさと塾」では、①体験型②実習型③定住型の3つの定住促進プログラムを実施。

委員会の活動は、定住・体験希望者の受け入れや各集落への紹介、5日間の定住体験機会の提供などを担当する「新規定住促進班」と、2泊3日で山村生活や文化を理解する機会の提供を担当する「体験受け入れ班」がある。

・事業の成果

新規定住者は人口の45%にあたり168人、73世帯にのぼる。

消防団や青年会など若者の移住が多いため、保育所や小中学校が存続し新校舎も今年度新築予定。

棚田など伝統的な農山村の景観が保全されている。

盆踊りや宮祭りなどの伝統芸能は継承されている。

有機農業や農産加工品のどの産業振興が推進されている。

・今後の課題と方向性

定住者への住宅や農地の確保。

有機農産物の高付加価値化やブランドの確立など産業振興と雇用の確保。

全国で移住受け入れが増加していることにより、新規定住者が減少している。

サル、イノシシなどによる鳥獣被害対策など、

・所感

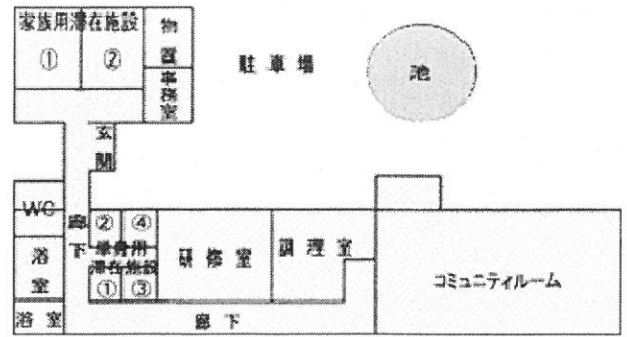
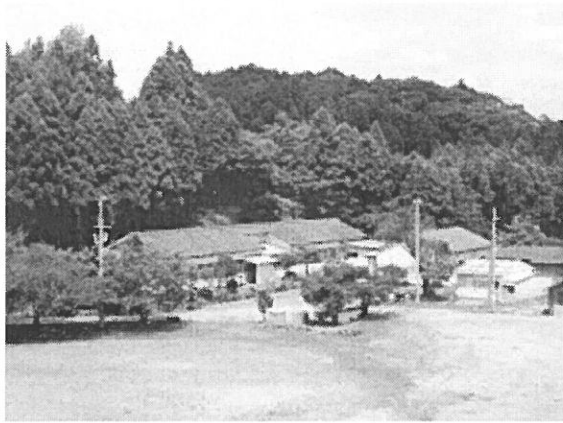
組織的な新規定住者の受け入れをされている。

5日間の定住体験機会を提供し住民との交流を新規定住促進班、農林業をとする山村生活・文化を理解する機会の提供（2泊3日）体験受け入れ班

田舎で暮らしたいと言う強い動機のある人が移住してくるので、地域を知ってもらうためにできるだけ体験をさせる。

地域の文化やしきたりなどには協力や参加を必ずしてもらい、地域が変わるのではなく移住者が溶け込む。町立「籠ふるさと塾」にて原則1年以内の入所の中で、生活や文化を理解し農地や住宅を確保する。

環境的にかなり厳しい状況の田舎でも移住者を呼ぶことが出来る。定住促進の取組が推進できる可能性は多くの中山間地を抱えるこの浜田市でも出来ると感じた。



「籠ふるさと塾」

②津野町床鍋地区住民主体による地域活性化の取組

【取組の概要】

津野町床鍋地区は高知県の中心部に位置し、周囲を山に囲まれ陸の孤島と言われ、人口減少や高齢化で集落消滅の危機にひんしたが、廃校を活用した農村交流施設「森の巣箱」を整備し、地域内外の交流を通し活気ある集落を実現した。

・活性化への取組

最盛期は集落内に100名あまりの児童がいたが、年々過疎化高齢化が進行し昭和59年には集落のシンボル床鍋小学校が廃校となった。

平成7年、「このままでは集落が消えるかもしれない」との危機感をいだいた集落の青年有志が立ち上がったのを機に「床鍋地区開発検討会」を発足し、6年間にわたる役場と住民との対話は100回を超えた。

平成12年「床鍋集落活性化プラン」をまとめ、プランの目玉は廃校施設の再利用とした。

約9000万円の県補助金を活用し、廃校は農村交流施設「森の巣箱」として生まれ変わり、運営は集落住民で行うこととした。

当初の運転資金として1世帯10万円、計400万円を住民が負担し、集落住民全員が「森の巣箱」のオーナーになった。

「森の巣箱」には交通弱者の高齢者から特に要望の強かった「集落コンビニ」のほか、憩いの場として「居酒屋」や「温泉施設」を整備。2階は宿泊施設に。

「森の巣箱」の利用者は地域住民の集落出身者ぐらいと想定されていたが、オープンから10年を経て大きな変化が出てきた。2年目から毎年行われている「ホテル祭り」は県内外から1000人を超える人が訪れるようになり、地元住民手作りのおもてなしも話題となり評判が広がる。

この施設での交流をきっかけに結婚したカップルも5組誕生し、披露宴も「森の巣箱」で行われた。

・集落福祉機能

「森の巣箱」は高齢化率50%に迫る床鍋集落が安心して暮らしていくための大切な支え合いの拠点になっている。

高齢者だけでなく全世帯の安全安心を確保する「床鍋地区アクションプラン」を策定し、防災と支え合いの地域をつくる。

その1つが全世帯に配布してある「お守りカード」で、各家庭の安全安心の情報を

共有した見守りと助け合いの緊急連絡カードとなっている。
また、災害時のための避難訓練も全委員参加で実施されている。
JAとの協力で近くの集会所で高齢者によるししとうのパック詰め作業が毎日行われており、「床鍋式デイサービス」の形になっている。



津野町床鍋にある「森の巣箱」
廃校を利用した地域の拠点



「集落コンビニ」

・所感

施設の代表は日本一幸せな集落をつくることを目標に取り組んできたと言われていたとおり、集落住民全員が「森の巣箱」のオーナーになり、買物難民の解消や、人が来ることによって住民が元気になると考え、宿泊できる拠点づくり
そうした住民主導の集落づくりが行われていると感じた。当日も電話での予約申し込みなど忙しそうであった。